

# 湘南 国木田独歩記(五)

神 野 幸 人

(会員 鎌倉市台)

## 四 湯河原の足あと

(1) 中 西

独歩年譜によると、明治三十四年夏、明治三十九年八月末より九月初旬、明治四十年六月十日より七月と三回湯河原に來遊している。初めは清遊後は静養と闘病の目的の保養である。この三回の外に四十年頃一、二度來遊したとあるが、当時の交通事情や独歩の行動から考えて無理だと推察される。

常宿は中西旅館であるが、其の頃の中西は今のたか杉(鉄道監理局保養所)の処である。バス道が藤木橋を左に見て二百米程行くと赤い欄干の新しい橋を左折して川を渡り直ちに右折する。その橋際に干物を売るたか杉の売

店がある。その裏手、藤木川に添って樹木に囲まれ、羽目板に蔦をからませた軒の傾いた日本瓦の二階建の古びた家がある。

川面に開け放たれた窓の中に人も気なく、物置のようである。この建物が昔の中西の名残である。旧中西

は洪水で流失し、今はこの橋より百米程上流の右手にあり、中西橋を玄関とした和風な門構え、砂利を敷いた庭と樹木に囲まれた日本建築は、昔日の味を移している。この温泉宿のことを独歩はこう記している。

都の友へ B生より



藤 木 川

此温泉が果して物質的に僕の健康に効能があるか無いか、こんな事は解らないが何しろ温泉は悪くない。少なくとも此処の温泉は悪くない。

森閑として浴室(ゆどの)、長方形の浴槽(ゆぶね)、透明(すきとほ)って玉のような温泉、これを午後二時頃独占していると、くだらない実感からも夢のような妄想からも脱却して了ふ。浴槽の一端へ後脳を乗て一端へ爪先を掛けてふわりと身を浮べて眼を閉る。時に薄目を開て天井際の光線(あかり)窓を見る。碧に煌めく桐の葉の半分と、蒼々無際限の天空が見える。老人なら南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏と口の中で唱える所だ。老人でなくても此心持は同じである。

部屋に帰って見ると、ちゃんと整頓して居る。出る時は書物やら反古やら乱雑極まって居たのが、物各所を得て静かに僕を待つて居る。ごろりと転げて大の字なり。座布団を引き寄せて二つに折て枕にして又も手当り次第の書を読み始める。

独歩の受持女中には現在の主人、露木一男氏の叔母に

あたるお絹さんという人が当り、行き届いたサーピスをされたので、独歩も至極のんびりと家庭的な気持ちで滞在したという

小説「湯河原より」に登場する人である。

此時フト思ひだしたのはお絹のことである。お絹、お絹、君は未だ此名にはお知己(ちかづき)でないだろう。君ばかりでない。僕的朋友の中、何人も未だ此名が如何に僕の心に深い、優しい、穏やかな響を伝へるかの消息を知らない。……

僕は少女を思ひだすと共に「恋しい」「見たい」「逢いたい」の情がむらむらとこみ上げて来た。君がと何と言ほうとも実際さうであったから仕方がない。此天地間、僕を愛し、又僕が愛する者は唯々少女ばかりといふ風な感情が為て来た。

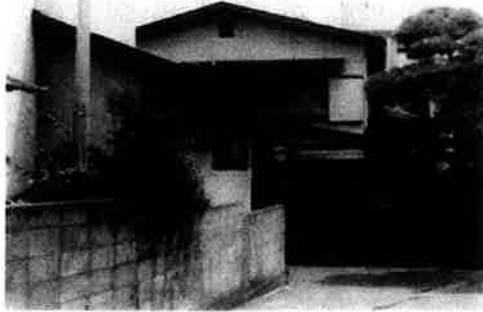
ああ是れ「浮きたる心」だらうか。何故に自然を愛する心は清く高くして、少女(人間)を恋する心は「浮きたる心」「いやらしい心」「不健全なる心」だらうか……僕はお絹が梨をむいて、僕が独りで入っている浴室にそつ

と持つて来て呉れたことを思ひ、二人で溪流に沿うて散歩したことを思ひ、其の優しい言葉を思ひ、其の無邪気な態度を思ひ、其の笑顔を思ひ、思わず机を打って「明日の朝に行く」と叫んだ。

お絹とは何人ぞ。君驚く勿れ、芸者でも女郎でもない、海老茶式部でも、島田の令嬢でもない、美人でもない、醜婦でもない、ただの女中である。

今僕の斯ち筆を

執つて居る家の女中である。田舎の百姓の娘である。小田原は大都会と心得て居る田舎娘！この娘を僕が知つたのは昨年の夏君も御存知の如く病後、赤十字社の医者に勧められて二ヶ月間、此の湯河原に滞在して



跡中西旧

居た時である。……………

お絹は最早中西屋に居ないのである。父母の家に帰り、嫁入り支度に取りかかったのである。昨年の夏も他の女中から小田原のお婿さんな嬲られて居たのを自分は知つて居る。ああ愈々さうだ！と思ふと僕は嫌になつてしまつた。

一口に言へば、海も山もない、沖の大島、彼れが何だろう。大浪小浪の景色、何だ。今の今まで僕をよろこばして居た自然は、忽ちの中に何の面白味もなくなつた。僕とは他人になつてしまつた。……〔後略〕

と、その熱烈な恋愛描写は独歩の人柄を物語るにふさわしい作品である。

明治版「湯の町エレジー」である。

昭和版「湯の町エレジー」を記して独歩の心情を偲ぶとしよう。

風のたより 聞く 君は

温泉(いでゆ)の町の 人の妻

ああ 相見ても

暗れて語れぬ この想い  
せめてとどげよ 流し唄

(2) 湯河原道中記

「湯河原ゆき」に品川から湯河原までのことが詳しく記され、六月二十日と明記している。六月に湯河原に行ったのは明治四十年だが、人車鉄道(トロッコ)は明治三十九年十月に軽便鉄道に生まれかわったので、この記は明治三十九年十月以前の状況である。結核発熱の病人でかくも詳記とは驚嘆の外はない。

新宿で国府津までの切符を買い、品川まで行き、品川のプラットフォームで一時間以上待って、新橋発神戸行の列車の国府津止まりの箱が三、四輛連結してあるので、それに乗り込むと同乗者は老人夫婦きりで頗る空いて居た。

待ち疲れたのと、発熱で少なからず弱って居る身体をドカと投げ下ろすと、眼がふらついて思はずのめりさうになる。こんな状態での湯河原行きであった。同伴者は病人の附添人役の親類の伯母である。

十一時過ぎ品川発、汽車は丁寧に各駅を拾ってゆく。

梅で名高い蒲田・京浜急行電鉄に梅屋敷と云う駅があり、梅林の名残りを今に残している。真紅な帯を締めた娘も混じって田植が盛んに行われていたと夢のような蒲田風景である。川崎大師は当時も有名であった。

鶴見・神奈川・平沼を過ぎ、大船で弁当を買う。大船軒の鰯の押ずしである。非常においしい弁当であるが、独歩は発熱で味覚がおかしかったか、「酔が利き過ぎてとても喰へぬ」とある。

更に「弁当の一隅に箸を着けたが、ボロボロ飯で病人に大毒と悟り、茶ばかり飲んでビールに正宗を買わなかったことを悔やんだ」とあり、車内の老夫婦をそれとなく観察していて車窓の景色は余り記していない。

大磯で老夫婦が下車すると伯母との対話もなく国府津に着く。当時の東海道は国府津より御殿場を経て沼津に出ていた。小田原・箱根・伊豆方面へ行く人はここで下車する。(ちなみに、小田原駅は大正九年十月、湯河原駅は大正十三年十月の開始で、昭和九年丹那トンネルの開通で現在の東海道線となる)

不承不承にプラットフォームを出て紅帽に案内されて茶屋に入り、伯母が一寸用たしに立った間に正宗を命じ

コップであおりた。伯母が来た時は、最早コップも空壇も無い芸当をした彼に友人Mが声をかけた。

平凡な会話、平常なら当然の挨拶だが、清涼剤を飲んだようだがさすがしさで電車に乗る。先刻の手早い芸当が其効果を現わして来たので伯母への気兼ねも自分は自分と腹が定まり、車窓から雲霧に埋もれた山々を眺め、「走れ走れ電車」、湯河原ゆきには、国府津・小田原間に

ついては何も記していないが、「湯河原より」には、電車が景気よく走り出す。「函嶺諸峰は奥ゆかしく、巖かに、面を圧して近づいて来る。軽い、淡々しい雲が沖なる海の上を漂うて居る。鷗が飛ぶ浪が碎ける。そら雲が日を隠した。薄い影が野の上を、海の上を這ふ。忽ちまた明るくなる。」

小田原へ着いて何時も感ずるのは、自分もどうせ地上に住むならば此処に住みたいといふことである。古い城、高い山、天に連なる大洋、且つ樹木が繁っている。洋画に依って身を立てやうといふ僕の空想としては此処は永住の家を持ちたいといふのも無理ではない。

と記してある。この電車とは明治三十三年国府津・小田

原間に開通した電気・鉄道のことである。

小田原より湯河原までは、熱海行きの人車鉄道を利用して門川（もんがわ）で下車する。この人車鉄道とはトロッコに箱を乗せたもので定員六名、三名の工夫が、地下足袋、脚絆、もも引に腹掛けスタイルで後押しして走り、熱海までの所要時間は四時間、運賃は七六銭であった。

その後、明治三十九年十月に煙突のばかでない軽便鉄道となり（所要時間三時間、運賃九三銭）となったが、これらの車も運賃が高かったのか、小田原の商人は乗らず、小田原より船で真鶴、吉浜を過ぎ門川で下船して湯河原に行商に来たという。この人車鉄道は、芥川龍之介



人車鉄道（明治29年開通）

の「トロッコ」にくわしく書かれている。

独歩は、

自分は如何いふものかガタ馬車の喇叭(らっぱ)が好きだ。回想も聯想も皆面白い。春の野路をガタ馬車が走る。フワリフワリと生温い風が吹いて花の香が狭い窓から人の面を掠める。此時御者が陽気な調子で喇叭を吹きたてる……

ところで小田原から熱海迄の人車鉄道に此喇叭がある。不愉快千萬な此交通機関に此鳴物が附いている丈で幾何か興を助けて居るとは兼て自分の思つて居たところである。

まず、二台の三等車、次に二等車が一台。此三台が一列になってゴロゴロと停車場を出て、暫くは小田原の場末の家並の間を上りには人が押したり、下りには車が走り、走る時は喇叭を吹いて進んだ……

現在、小田原―湯河原は東海道線で十五分、車利用は真鶴有料道路で三十分足らずである。

人車鉄道は真鶴有料道路と異なり、山の中腹にある旧道を通つていたのだろう。大正十二年八月、十月の湯河原駅開通を予定して(九月の大震災で十二年十月に開通)上野屋が発行した湯河原温泉案内図によると真鶴より吉浜・門川・伊豆山・熱海へと軽便鉄道が通つている。吉浜村は海水浴場としてその名はあるが、門川はその海浜を埋立てられ、埋立地はその一部を荒涼とした空地として廃品置場の如くみにくい姿をさらしていて昔日を偲ぶ術がない。

日が暮れかかつて雨は益々強くなつた。山々は悉く雲に埋れて僅かに其麓を現すばかり。我々が門川で下りて更に人力車に乗りかへ湯河原の溪谷に向つた時は、さながら雲深く分け入る思があつた。

先述上野屋の湯河原温泉案内の写真によれば、門川村は海辺に家並あれど後方は一面田圃である。又湯河原までの宮下村も山裾の民家の外は一面の田圃で人力車が通つた道も小石の多い道で病人にはきつい道のりであつた。

(3) 湯河原散歩道

山迫りて藤木川の溪流沿に旅館の並ぶ湯河原の散歩道は一筋しかない。その藤木川も急流である。奥湯河原より落合橋の間の堰の数と巨石の数を数えれば大雨に如何に洪水したかをうかがえる。

そもそも湯河原温泉とは、今の観光会館あたりを「下の湯」と呼び、少し上流を「中の湯」、中の湯の上流を「上の湯」と云い、

「中の湯」は湯がぬるくて入浴には適せず、「下の湯」は一軒の農家があったのみで、「上の湯」の辺りが湯河原温泉の中心であった。

湯河原温泉が温泉場としてその後発展する機



湯河原温泉場（明治41年当時）

会を得たのは、日露戦争の傷病兵患者を受け入れた明治三十七年以後のことだ、明治四十一年の写真によれば、天野屋、上野屋、箱根屋、中西、伊豆屋、富士屋が莞（いらか）を争っている。今も「上の湯」の湯戸から旅館名をもじった上野屋という古い旅館が旧地にあるが、当時のメインストリートはその後藤木川の右岸に開通したバスの為に主役の座を下り、奥湯河原にも温泉場が出来、山越えに箱根に通ず道路も開通して、湯治客が一週間、二週間も逗留した湯河原温泉の風情はなくなった。

「新編相模風土記稿」の「土肥宮上村」（一八三六）の中に「温泉・小名湯河原にあり……此地の温湯、治効に至っては、箱根熱海の泉伯仲すべく、但僻地に在て、山川の勝なく諸事自由ならず……」

独歩も、

「石ばかりごろごろした往来の淋しき、僅に十軒ばかりの温泉宿、其外の百姓家とても数へる許り、物を商ふ家も準じて幾軒もない寂漠たる溪間、この溪間が雨雲に閉ざされて見る物悉く光を失った時の光景……」

「人家を離れて四五町浜(さかのば)ると既に路もなければ畑もない。ただ左右の断崖と其間を迂回り流るる溪水ばかりである……」

この風情を残しているのは、不動の滝から奥湯河原の間である。この間五百米程は左右断崖が藤木川を押し曲げて民家もなく、車量も少なく、車道が突出た巨石の下は苔むし、甘ずっぱい匂いをした夏草の花が堰の水音にゆれている。断崖の荒岩に鳥が群集して人気を拂っている風景は明治である。ただ藤木川が石垣され、流砂止めの水堰が余り多くて溪流の情趣がないのが残念である。

独歩とは逆に奥湯河原よりこの道を下り不動の滝より中西橋をして「たか杉」として旧中西の跡地を旧道添いに下り、万葉公園まで歩いた時、玉川きび餅店の老夫人の昔話に三弦の音和し、万葉館の庭石に水撒く老師の出迎えをうけて独歩の話をきき、更に資料をいただくこの時、汗して万歩、独歩の足あとを追って湯河原に来た甲斐と満腔の満足感にしたる。

先日、上野屋の番頭さんの好意、上棲しては御内儀の御好意と昨日までは無縁の土地が独歩のおかげで親戚に

なった。

万葉公園の熊野神社の鳥居のそば、ぶな科の老樹の基に独歩碑あり。

表に、「湯河原の溪谷に向った時、さながら雲深く分け入る思があつた。」

独歩

裏面には、湯河原は全に最も縁故深き土地なりと、独歩は云ふ。其他の人々發起して此碑を建つ

吉江狐雁 撰文

小杉放庵 書

昭和十一年初夏

と、彫している。

湯河原に於ける独歩の足あとは、ただ一筋であるが、その一筋を大切にする人々に慕われ、自然の溪谷をそのまま生かした万葉公園の一角、万葉を説く老師に見守られた独歩碑、湯河原に於ける独歩は幸福であつた。

## 五 茅ヶ崎市の足あと

(一) 南湖院

明治三十八年四月、健康を害し銚子で静養した独歩



は、その後、湯河原・西大久保・湯河原・茨城県湊町と  
転地療養を続けたが、人のすすめで、茅ヶ崎南湖院に肺  
結核治療のため入院したのは明治四十一年二月三日であ  
る。

結局、終焉の地となる。六月二十三日の死亡の日まで  
五ヶ月程の南湖院生活だが、独歩は時すでに重症で、文  
学どころでなく、満足に海辺も散歩出来ず茅ヶ崎の海を  
病床より眺めていただけであつたらう。

鎌倉より江の島と相模湾に走る湘南遊歩道を西に下  
る。辻堂団地を過ぎ、一きわ高いホテル(平成十年にな  
くなつた)を過ぎる頃より松林が多くなる。暫く行くと



南湖院遺棟

海浜に食堂・スタンド・釣店が一団となつた処があり、  
それを過ぎると、白砂青松の彼方、群礁に一つだけ高い  
烏帽子岩が浮かぶ。

この絶景を左に見て、右に目を転ずると、松林の中無  
線塔が一基天を衝いている。その奥に現在高層建物がつ  
くられている。南湖養老院である。

明治三十一年高田畊安によつて建設の槌を打たれた南  
湖院はその敷地五万余坪、数十棟の東洋一の結核療養所  
である。その南湖院も昭和十九年には海軍に一部接收さ  
れ、二十年二月九日畊安の死、五月海軍に前面接收され  
戦後は進駐軍の占領するところとなり、その灯を消した  
が、今も松林の間に洋風館の病舎や附棟が数棟残存して  
いる。独歩が入院したのは、明治三十八年竣工の第三病  
舎であるがこの建物は今はない。

茅ヶ崎の砂は鎌倉に比し色黒く粒大なり

風物荒寥たる処似なり

茅ヶ崎の空気は荒し、肺を病む人には適せざる如し

又湿と乾その差も甚し

茅ヶ崎は松と麦と桑と甘藷のみ

目を慰むるものなし

「余は東京を去るの日、その地に接吻せざりしを悔みとす。

嗚呼、東京の酒、東京の霧、東京の肴、東京の響き……」

と、東京を恋うる結核患者の悲歎を述べている。田山花袋の紹介で独歩の「病状録」を記した、青山青果は独歩の最後の日を次のように記している。

「この通信ここに終る。吾が崇拜する国木田独歩氏は、今日、六月二十三日午後八時四十分、相州茅ヶ崎南湖院第三病室に瞑目された。故人の意思もあり、かつは家族の人々も屍体室に移すに忍びずとて遺骸は収二氏と二人して、これを担架に乗せて、雨後の真黒な松原の中を別荘へと移した。

別荘とは独歩氏入院後家族等の仮りに棲まわせた海浜の小屋にて、同氏は一度も見られた事がない。屍となつて始めて自分の家に帰られたのだ。

この通信は午後九時四十分、その六畳の一間遺骸の枕頭において書く。旅の上、知る家はなし。夜はふけたり。屏風その他の用意もない。

軀を北枕に直して、蠟燭一基、香烟一縷、白ハンケチを独歩氏は両掌を胸に合わせて、白緋の浴衣のまま静かに牀上に横たわっている。母堂まさる、夫人治子、令弟収二氏、同夫人替子、きみ子、青果の六人寂しく通夜す。令息令嬢は巖君の死も知らず、小さないびきして次の八畳の蚊帳の中に眠っていられる。嗚呼独歩氏逝く。明日は友人知己の人々来らるべし。諸方に打電す……」と。

南湖院の東、市宮野球場の南側に国木田独歩の碑がある。一生に一度だけ他人にすすめられて来て茅ヶ崎で死んだ彼を弔うために作られたもので、

#### 独歩追憶碑

彼の似顔絵と「渚」の一説

永劫の海に落ちゆく

世世代代の人の流れが

僕の前に横たはって居る

### 独歩

と刻まれている。

茅ヶ崎市の「独歩を偲ぶ会」の人々は毎年六月二十三日、この碑前に集まって弔すという。

独歩、以って瞑すべし。

行年三八才

戒名 天真真独歩日哲居士

佐伯を出でて十三年十ヶ月、七十年前のことである。

(完)

(昭和五十三年九月十八日)

### 後記

七月二十五日(火)湘南独歩記を思い立ち、例年のない連暑の中、逗子・鎌倉・茅ヶ崎・湯河原と、万歩汗して独歩の足あとを追う。

その間、鎌倉市に於ては、徳増五良吉様、良作様、白

橋勝太郎様、ハナ様、トミ様、池田美幸様、増田一仁様、佐藤光子様。茅ヶ崎に於ては、川原利也先生、山田義秋先生、松崎様。湯河原に於ては、熊沢光芳先生、玉川屋きび餅店、上野屋の皆さんに大変お世話になりました。厚く御礼申し上げます。

又、逗子図書館、鎌倉図書館、藤沢図書館、茅ヶ崎図書館、小田原図書館、湯河原萬葉館に於ては心よく資料を貸出しいただいた外、愚問にも心よく返事下され感謝にたえません。

二ヶ月の取材では不備の点は多々あるが、素人の小生には限度であり、上出来と思っている。

独歩の足あとを追ったお蔭で各地に知人を得たことは最大のよろこびである。

書き了えて、十六夜の月に飲んだ酒は格別であった  
(昭和五十三年九月十八日記)。

